



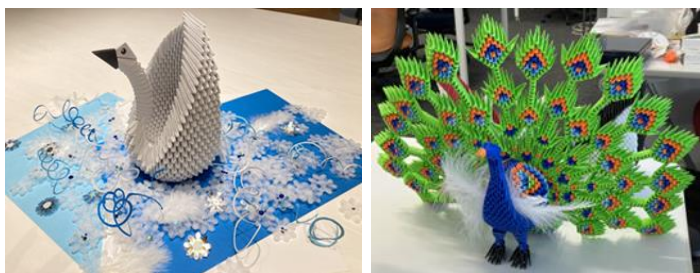
本プレサーバイは競輪の補助を受けて実施しました。

NPO法人 全国精神保健職親会 御中

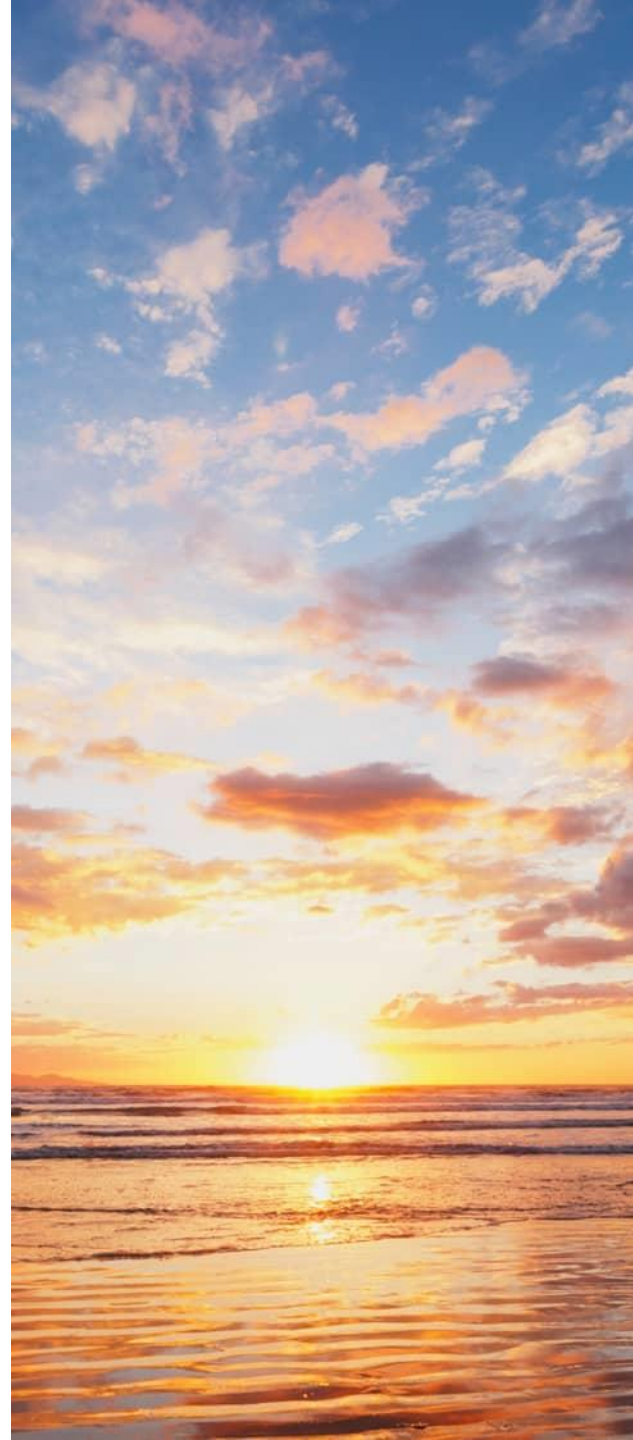
活動成果の評価と今後の展開について ～プレサーバイ資料～

NR | みらい株式会社

2024年 3月25日



<当社社員が作成したクラフトアーツ>



目次

01 プレサーベいのねらい

02 プレサーベいの進め方概要

03 プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

04 SPISのより有効な利用に向けて

01

プレサーベいのねらい

02

プレサーベいの進め方概要

03

プレサーベい結果に見るSPIS利用仮説

04

SPISのより有効な利用に向けて

1. プレサーベイのねらい

精神・発達障がい者のさらなる活動を目指して。「取組課題の仮説整理」

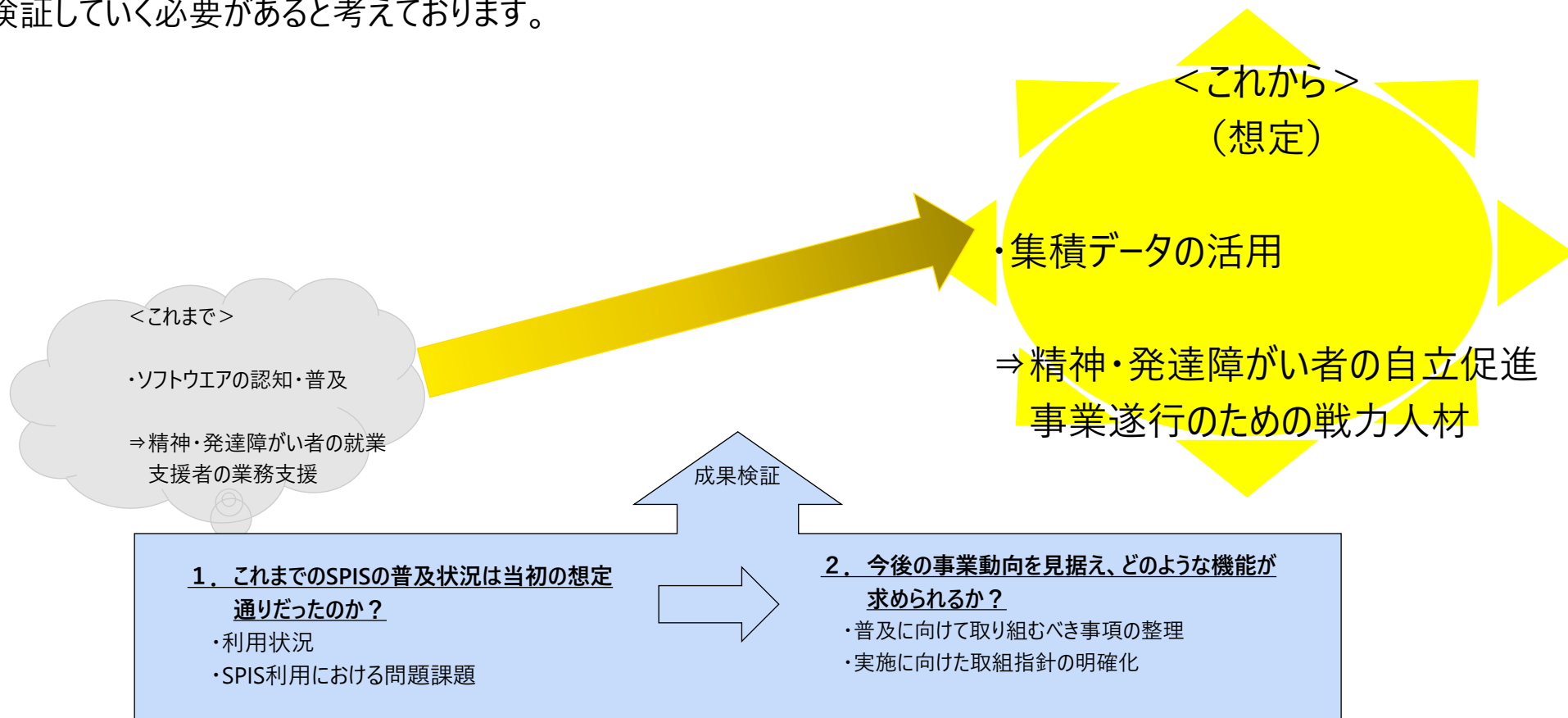
- 精神・発達障がい者のより一層の社会で活躍とさらなる支援を進めるべく、貴法人では、精神・発達障がい者を対象としたSPISの認知・促進のための活動を行なってまいりました。
- この活動に際して、これまで公益財団法人JK A様の補助事業の適用を受けて取り組まれております。10年間でおよそ70社・団体の方からのご活用を頂いております。
- この間、社会経済環境も変わり、特にコロナ禍による影響は日本社会を根底から変える大きなインパクトがありました。また、ESGに対する世間の関心の高まりのほか、障がい者雇用では、2024年度からの法定雇用率の段階的引き上げ、合理的配慮の義務化とアクセシビリティ整備など、企業経営への影響が大きな話題を呼んでいます。
- 人口が減少し、職場での人手不足が騒がれる中、障がい者の活躍の場が広がることの期待がある一方、障がい者自身の自立も求められます。
- そこで、本プロジェクトは長年取り組まれてきた活動に対し、今後SPISがどのように展開していくべきかを見極めるためのプレサーベイとして取り組むことになりました。具体的には、
 - 利用者から見たこれまでの活動内容と成果についてのレビュー
 - 今後の活動の方向性を検討を明らかにすることを目的としております。さらなる活用を目指して、これからの取り組み課題仮説について整理いたします。

1. プレサ-バイのねらい

来年度の活動の方向性：

～少子化時代における精神・発達障がい者の戦力化に資する取り組みを明確化～

- 貴団体は、精神・発達障がい者との円滑かつ充実したコミュニケーションに向けてSPISを普及定着を通じて進めてまいりました。
- 今後のSPISの普及活動は、利用者の事業環境や活用状況が変化したことを踏まえると、今までの延長上の活動ではなく、提供する機能の拡充や、より戦力的な人材を養成するためのツールといった考え方等の状況に応じた視点で検証していく必要があると考えております。



01

プレサーベいのねらい

02

プレサーベいの進め方概要

03

プレサーベい結果に見るSPIS利用仮説

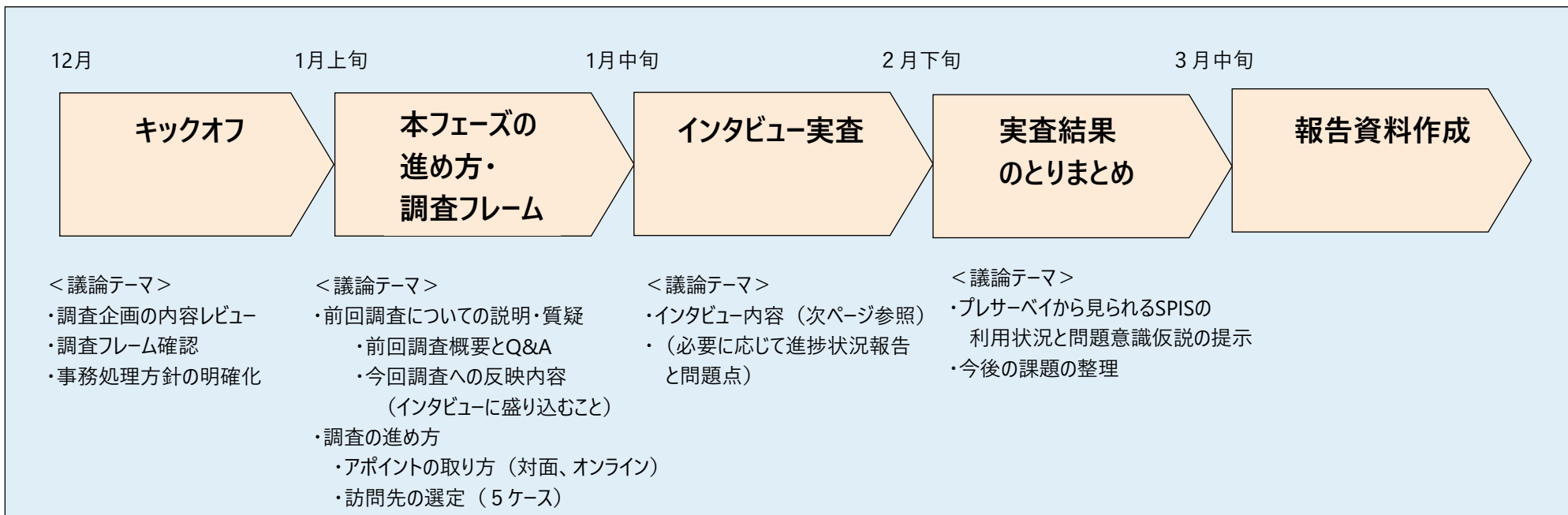
04

SPISのより有効な利用に向けて

2. プレサーベイの進め方概要

活動の節目にミーティングを設定しながら進めました

■ 本プロジェクトでの活動の進め方



プレサーベイにおけるインタビュー調査の進め方

■ インタビュー調査期間

2024年1月から3月

■ 調査項目

- 1) 現状の利用状況についてのお伺い
 - ・プロフィール：利用の経緯、対象人数 等
 - ・現在の利用状況：利用頻度、支援者に対する対象者の人数、利用効果、感じている課題 等
- 2) 「これから求められる機能」仮説についての見解
(例) 業務の「見える化」について
 - 新たな利用について：各人の業務目標の設定、業務手順やプロセスなどの提示・指南
 - 能力の引き出し、モチベーションアップについて
 - 人材管理に必要な費用ではなく、人的資源アップのための投資としてのSPISについて
- 3) 今後に向けて

■ 調査対象

- SPIS利用企業・団体（5ケース）

■ 調査方法

- ヒアリングによる調査（ZOOM面談方式、対面方式）

01

プレサーベいのねらい

02

プレサーベいの進め方概要

03

プレサーベい結果に見るSPIS利用仮説

04

SPISのより有効な利用に向けて

3. プレサーバイ結果に見るSPIS利用仮説

支援機関と企業によって、SPIS利用に対する期待の内容に違いがある？

SPIS利用を見ると、支援機関は対象者の状況変化のサインを収集することが主目的であるのに対して、企業の場合は対象者のサインのキャッチのみならず、利用を通じて組織運営への効果にも期待が見られます。

SPIS利用者状況 利用団体・利用企業 利用期間	就労移行機関		民間企業		
	A支援センター	B就労移行機関	X社	Y社	Z社
利用対象者	2年	6年	3年	4年半	5年
利用対象者	8名(就職が決まりそうな方から、就職後の方まで)	6名。精神・発達。年代は、18歳から33歳	20名(精神がメインだが、実習生、健常者も利用)	13名が利用し、現在継続しているのは6名	51名(精神・発達が深い)
利用経緯	就職が決まった方の定着支援として、電話よりやり取りしやすく、気軽に入力可能だったため	精神・発達に特化した事業所を立ち上げるようになったため(紹介を得て利用開始)	別ツールを利用していたが、支援員間での情報共有ツールとしてより有効だったため	精神・発達の入社により、現場が疲弊して仕事にならなくなったため	職域拡大による精神の雇用増加を踏まえ、コミュニケーションツール位置付けたため
支援者	3名	2名～3名	3名～12名：対象者一人当たり	35名	46名
支援体制	月1でスーパーバイズ	担当者のみ	担当者・保健師・産業医・定着支援員	担当者4名・リーダー13名・マネージャー15名・管理職1名・社外2名	担当指導員・課長・定着支援員
利用頻度	定期的ではなく、書き込みたい時に入力	出勤時、退勤時、必ず入力	頻度は人によってまちまち	都度	業務終わりに毎日入力
利用効果	本人の躓きやすいポイントやサインを拾いやすい	感情が見えにくい対象者でも、喜怒哀楽を拾える。	記録の数値化ができるため、自己理解が進み、定着、離職防止に効果。	自己発信ができるようになる。管理職にとっても配慮事項理解が進む	統計機能により、不調サイクルの把握、不調予測が可能になる
感じている課題	コメント入力中に、下のほうにあるボタンに触れて、SPISが落ちてしまうことがあり、コメント途中で、利用者が見えてしまい、誤解が生まれる恐れがある	アクセスタイミングにより、更新が被り、入力コメントが消えてしまう日にち別での一覧化ができない	卒業が課題のひとつ。卒業しても週1にもどってくる	自己理解を本人に求めても認めないことで平静を保っている障がい者の場合は、否が応でも向き合われるため、横から誰かが入っても修復不可能になることもある	個別化と同時に担当指導員によって品質に差がでる(※コメントの内容・頻度・タイムリーな対応有無など)

3. プレサーバイ結果に見るSPIS利用仮説

SPISの今後の普及と新たな事業展開に向けて、いくつかの課題仮説がうかがえます

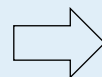
- SPISを活用する主体者の利用状況からみると、①利用環境（空間軸）、②利用によって得られる経験（時間軸）を中心に整理できます。
- さらに、これ等を支える機能や利用期間などを勘案して、ア) SPIS導入前の対応、イ) 利用期限等の条件への対応、ウ) 導入後の断念や中止などの防止・軽減に対する対応、にも課題仮説を追加しました。

これまでの利用状況やインタビューからうかがえるSPIS利用状況と想定される課題

<インタビューからうかがえる経緯や現状>

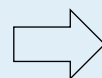
■利用環境の現状

- ・当事者と支援者との信頼関係の構築、支援者のスキル格差
- ・対象者数による利用方法の違い（2-3名、と数十名）



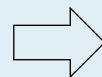
■利用によって得られる経験と活用

- ・経験を積むことで、当事者の自己表現、支援者のレスポンス方法の習得・向上



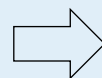
■SPIS導入の経緯

- ・支援センターからの紹介、他社事例をみて導入
- ・精神・発達障がい者の採用を契機に導入



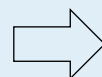
■SPISの利用期間の限定（特に支援機関）

- ・自立して就職していった後は一切タッチしない／その後も利用



■SPISの利用を断念しそうになる・なった

- ・当事者が「合わない」と言って断念、支援者が利用に消極的
- ・組織としてのマネジメントツールを中止（別方法へ）



<想定される課題仮説>

■仮説1 組織の成長を促すマネジメントサイクルの構築

- ・利用する当事者の自己表現能力の向上、能力の開花
- ・支援者のコミュニケーションスキルの向上
- ・これらを支える組織としてのマネジメントノウハウの向上

■仮説2 利用の経験ノウハウの蓄積、利用者の規模に応じた利用

- ・少人数での利用、複数拠点でシステムチックに対応する利用の相違
- ・利用経験に基づいて求められるスキルレベルの遷移

■仮説3 SPIS導入（エントリー）ハードルの克服

- ・「精神・発達の採用」という潮流に対する柔軟な対応
- ・興味を必要性に変えるために、信頼できるルートからの紹介

■仮説4 就職により施設利用を卒業する先を見据えた利用計画

- ・将来的に就職していくことを意識して、自立するための訓練的利用

■仮説5 SPIS利用断念の防止・最小限に抑えるための方策

- ・予兆の把握による「予防保全」と継続の意義や期待される効果の提示
- ・状況のモニタリング

3. プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

仮説1：組織の成長を促すマネジメントサイクルの構築

当事者の戦力アップ、支援者のスキルアップ、組織のレベルアップをSPISが後押し？

■ 組織の成長を促す3つのレベルアップが想定されます。

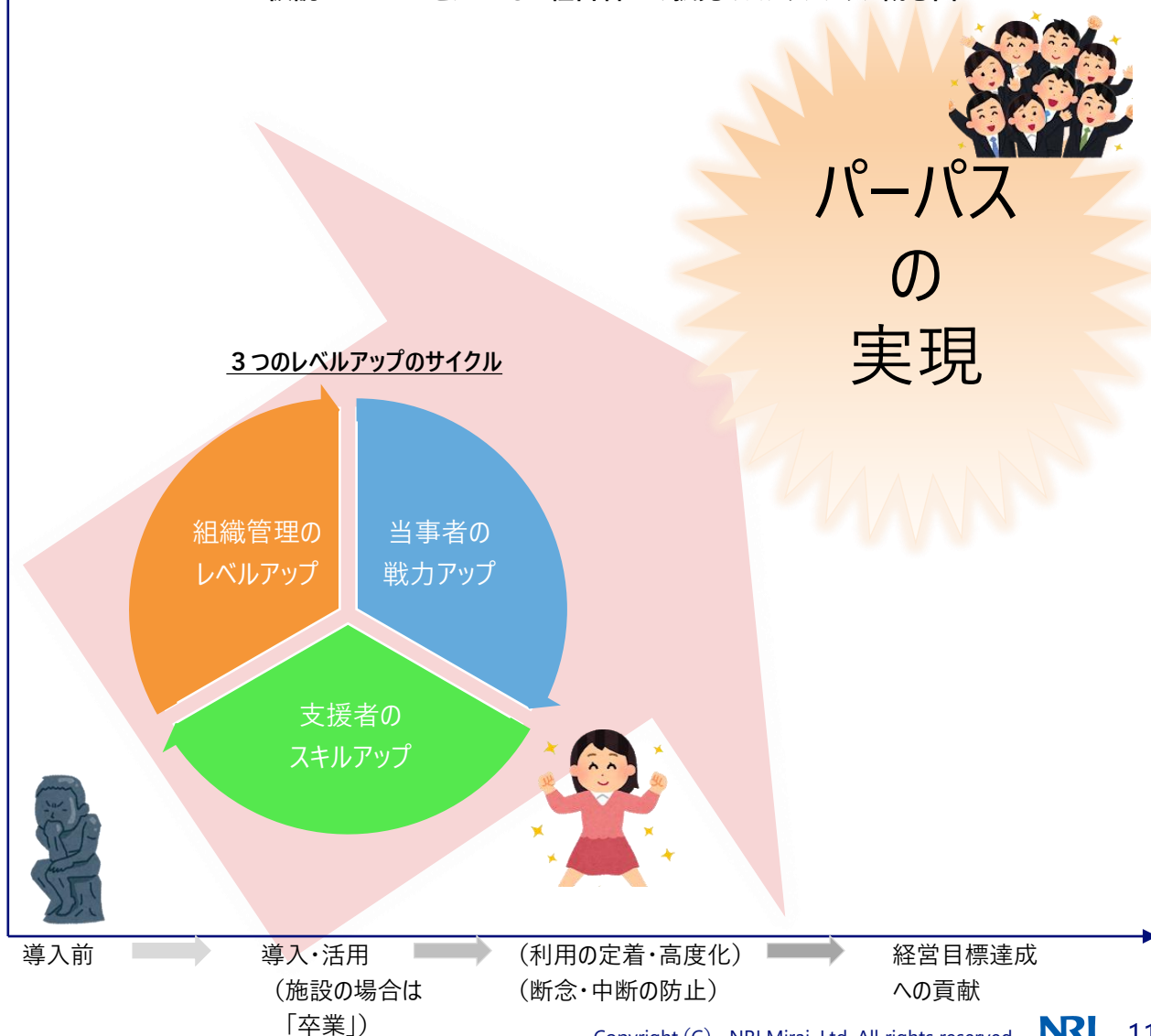
- 当事者の変化
 - 自分の考えがきちんと伝わっていたのか？
 - 自分が組織内でどのようにみられているのか、期待されているのか？
- 支援者の意識変化
 - 今までの接し方でよかったのか？
 - 当事者と目線が合っていたのか？
- 組織管理の変化
 - 多様化する障がい特性を考慮したコミュニケーションが取れているか？
 - 様々な職員の能力を引き出せるようなモチベーションアップやリードしていく管理運営になっているか？

※施設の場合は自立・就職とした「出口」達成に向けた取り組み

■ レベルアップ・サイクルを繰り返すことを通じて、組織運営も円滑高度化し、目標であるパーパスの実現に大きく貢献できると期待されます。

実現レベル

<仮説1：SPISをテコにした経営管理の拡充のステップアップ概念図>



3. プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

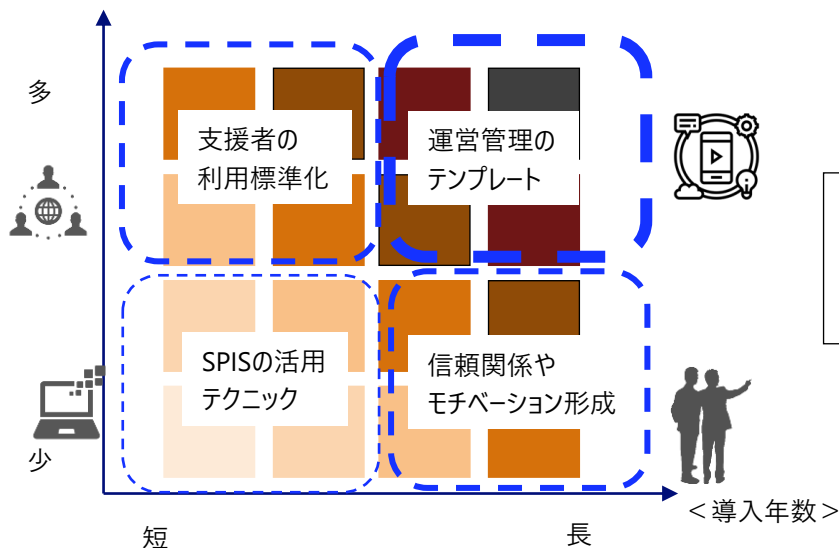
仮説2 利用の経験ノウハウの蓄積、利用者の規模に応じた利用 サービスメンテナンスは、これらを念頭に置いたきめ細かい対応が必要？

- 対象者数が多く支援者も広がってくると、その対応も様々になります。当事者の向き不向きや支援者間でのスキル格差なども顕著になっております。
- 一方で、SPISの導入と活用が定着してくると、その利用経験からSPISに期待（活用）する機能も変わっていくのではないかと想定されます。
- これ等を踏まえたサービスを提供することで、より利用価値を高めていくことができるのではないかと期待できます。

<利用規模と期間を考慮した活用の重点ポイント（想定）>

⇒ 目的や利用頻度等によっては複数のニーズも見られる可能性あり

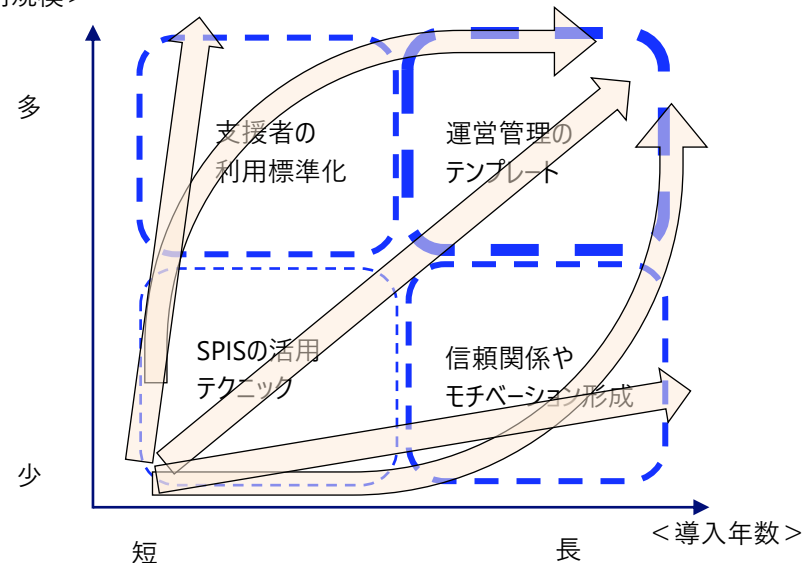
<利用規模>



<利用者属性に応じてその進み方は様々（想定）>

⇒ おそらく各局面や対応や対応方針によってニーズの違いがあるかも

<利用規模>

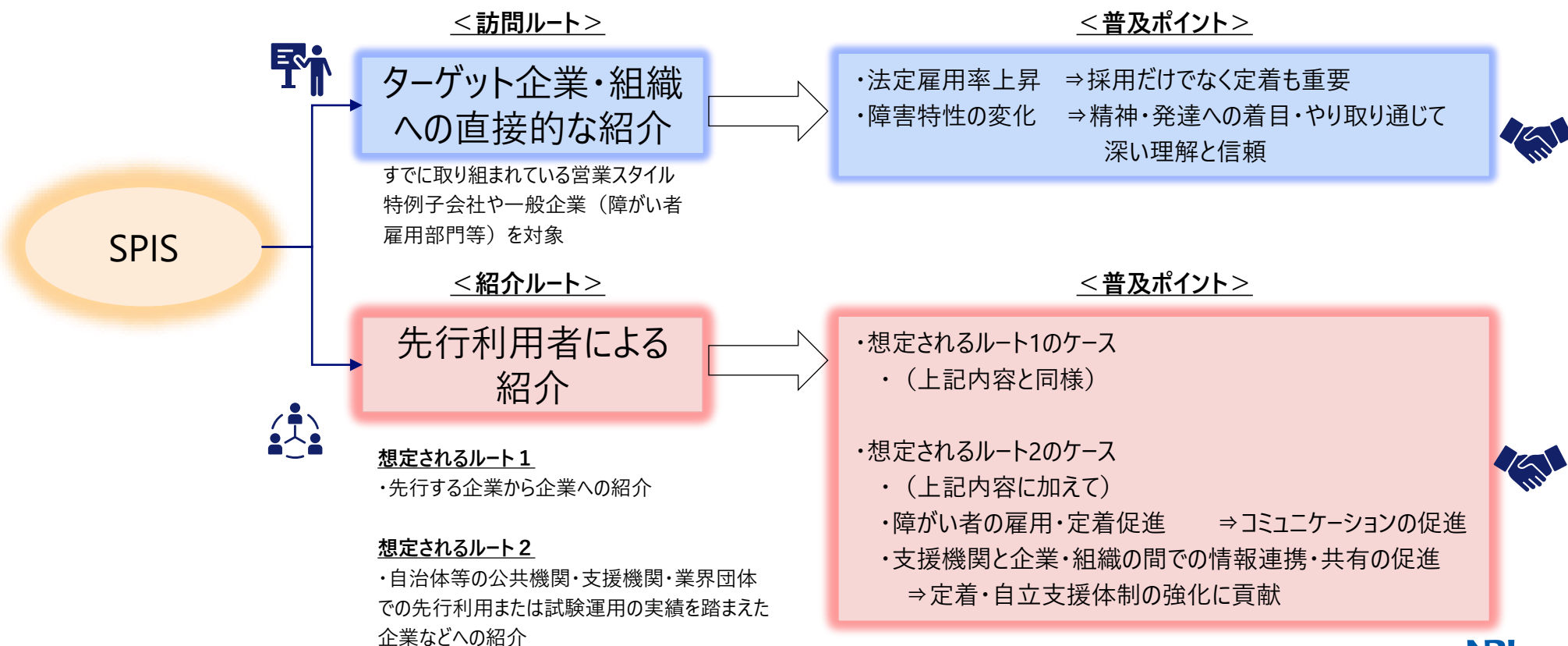


3. プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

仮説3 SPIS導入（エントリー）ハードルの克服 公的機関や第三者による紹介というルート普及との併用もあるのでは？

- すでに行われている訪問方式は、今後とも事業を継続していくうえでベースとなる普及啓発活動です。
- プレサーベイによれば、SPISの導入経緯を通じて利用者からの積極的な紹介「ルート普及」も選択肢の一つと想定されます。特に、公的機関や導入して実績をあげている企業からの紹介・アドバイスによる普及は有効と考えられます。

< SPISの普及拡大のルート >



3. プレサーバイ結果に見るSPIS利用仮説

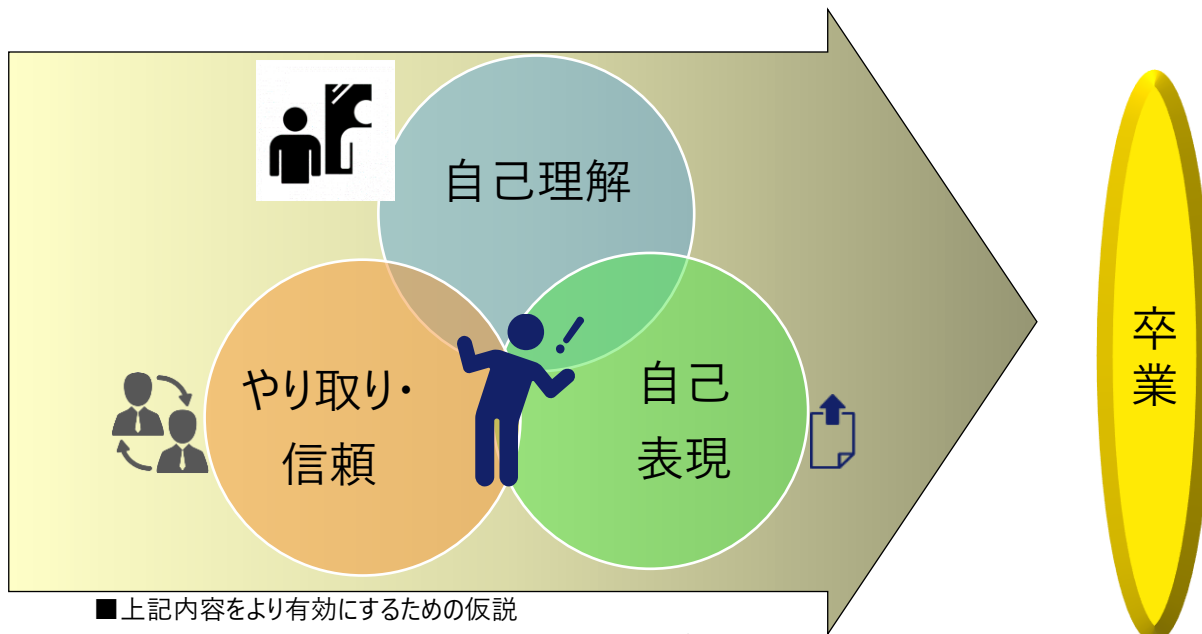
仮説4 就職により施設利用を卒業する先を見据えた利用計画

出口を見据えて信頼構築、自己表現、自己理解など、「訓練」に重きが置くことを念頭に置いた利用？

■ 就労移行機関が活用する場合は、当事者が企業等に就職して、施設の利用から卒業する場面が考えられます。施設からの卒業その他の形でSPISの利用期間が限定されるケースでは、その後（例えば就職後）の出口戦略を想定すると、たとえば

- 支援者とのやり取りを通じてコミュニケーションができる「信頼関係をつくること」
- 言葉で表現できないことを文章で書いてみる 「自己を表現すること」
- 自身を受容する 「自分を理解すること」

の理解促進（もしくは訓練）に重きが置かれるのではないかと考えられます。



■ その後の利用に関するサービス仮説
卒業後、もし就職先でSPISを利用していない場合、
・引き続き利用（就職先との調整が必要かも）
・ライトユース（内容は今後検討の必要あり）
等が考えられます。

■ 上記内容をより有効にするための仮説

・これまでの実績検索はもちろん、類似組織での事例が閲覧できるサービスや、意見交換の場を設定するなど、も考えられます。

3. プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

仮説5 SPIS利用断念の防止・最小限に抑えるための方策 予兆を把握し効果を示し道筋を明確化して抑制する？

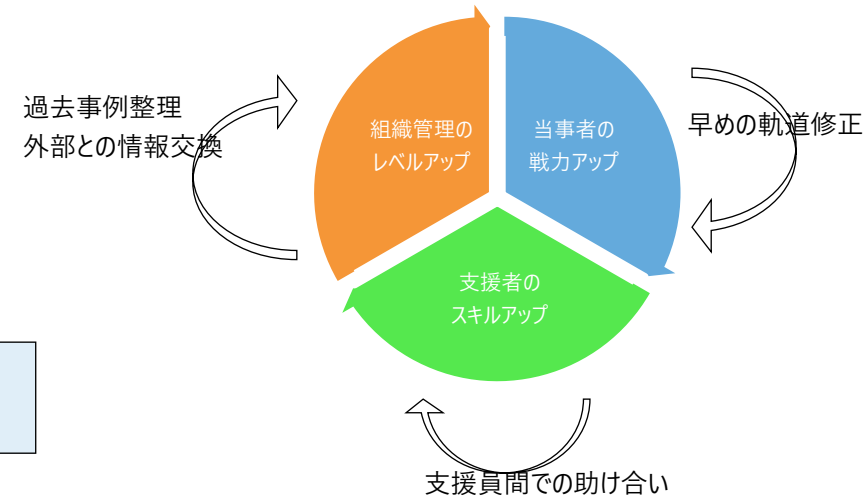
■途中で利用を断念するケースも見られます。これまで聞こえてきたのは「自分には合っていない」「効果が見えない」などですが、突き詰めれば、効果や導入メリットを感じていないのではないかと考えられます。

■また、個人だけではなく組織としての継続を断念することもうかがっております。

仮説1に沿って3つのレベルアップを図るためには、予防保全の観点から

- ①予兆を把握し、
- ②状況を確認・対応し、
- ③得られる期待効果（自立、成長）を示しモニタリングすることを通じて途中断念の最小化を図る必要があります。

<途中断念を最小限に抑えるために>



<それぞれの局面で進めるべきこと>

予兆の把握	おかしいな？と感じることを要チェック！（予防保全） 例：・記入内容が乱雑、または提出・レスポンスが減少 ・入力者が不満、苦痛を感じている
状況の確認・対応	まずは、なぜそうなったのかをしっかりと聞いてあげる 例：・入力が苦痛、「自分には合っていない」 ・目的がみえない、やる意味が分からない
期待効果の提示・モニタリング	記入方法やレスポンス方法をメンバー間で共有 例：・長文に対してはそれぞれ分けて確認、アドバイス ・続けることのメリット（レベルアップ）を提示

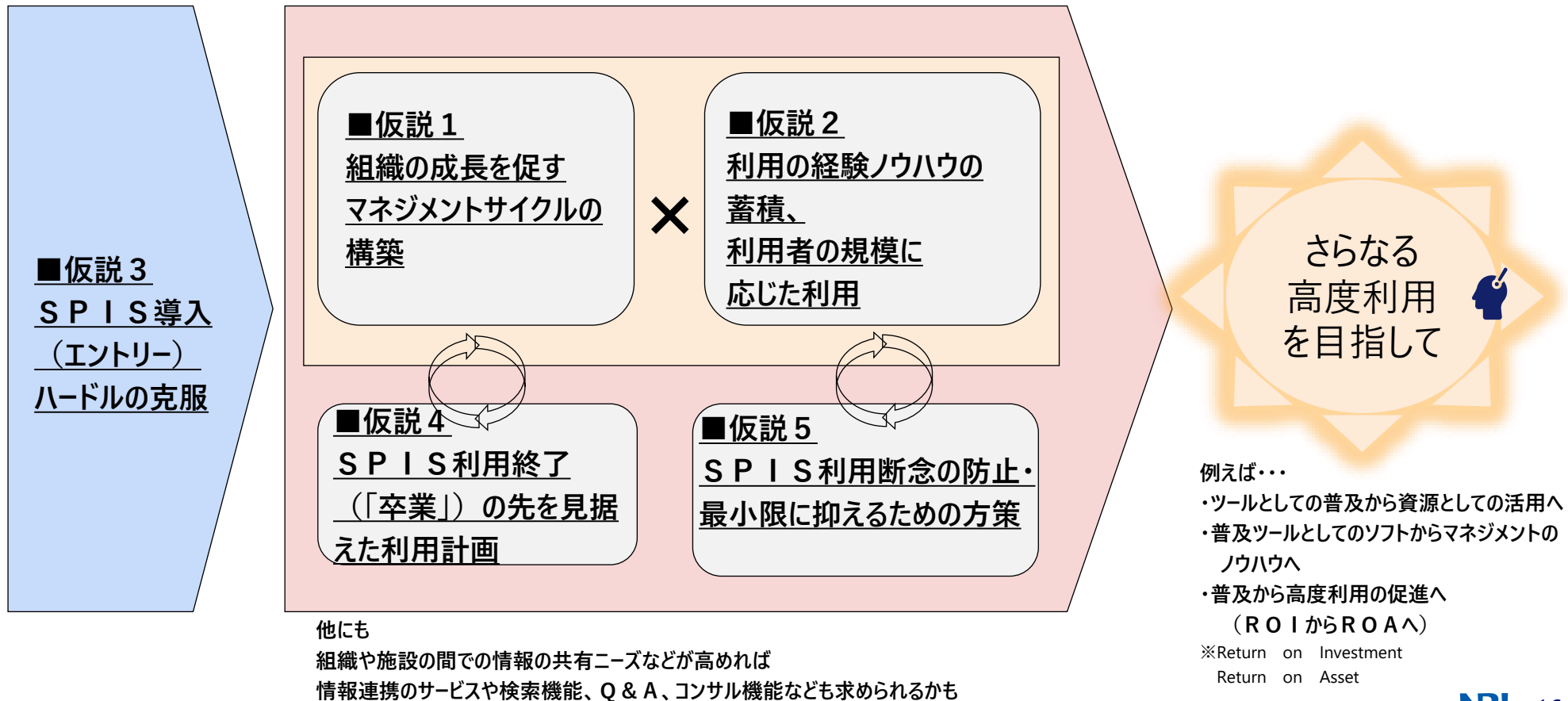
他社や他団体での事例などを共有できる仕組みも将来的には必要になることも想定

3. プレサーベイ結果に見るSPIS利用仮説

5つの仮説を検証し、対処していくことで、更なるSPISの利用価値向上が期待できます

- 障がい者雇用市場において、精神・発達障がい者の飛躍的な増加がしばらく増大すると想定されます。
- こうした中では、SPISの普及はもちろん、普及が一段落した後を踏まえた利用方法を今からイメージすることも有効ではないかと考えております。

< 仮説の全体図と目指す姿の方向性 >



01

プレサーベいのねらい

02

プレサーベいの進め方概要

03

プレサーベい結果に見るSPIS利用仮説

04

SPISのより有効な利用に向けて

4. SPISのより有効な利用に向けて

今後の活動に向けて SPISよりよい活用とマネジメントの向上に貢献するために

- プレサーバイで得られた5つの課題仮説が果たして有効なのかどうかを、さらに詳細に検証していく必要があります。
 - そもそも、仮説1で想定されるマネジメントサイクル（3つのアップ）が本当に機能するのか？
 - 仮説1のフレームを仮説2のような規模×利用年数を鑑みて、きめ細かく対応することでSPISの利用価値をあげていくことが可能か？
 - 今回の調査結果を基に議論した仮説3（導入前）、仮説4（時間制約）、仮説5（途中断念）については、個別に見ていく必要があります、さらに調査が必要ではないか？

- 上記内容を明らかにして、障がい者が戦力となって活躍する場を構築する有効なツールとしてさらにレベルアップしていくには、本格的な調査と今後の普及のための活動方針を定める必要があると考えられます。
 - 3つのアップを念頭に置いた現在の利用状況と利用者の利用意向
 - 規模別、利用年数別の利用状況及びサポートニーズ
 - 導入前における導入の決定事項の明確化、紹介ルートの適合性
 - 時間制限における自立という概念の妥当性、卒業後と就職先との連携方法
 - 途中断念防止のための予防保全、モニタリングの進め方
 - その他

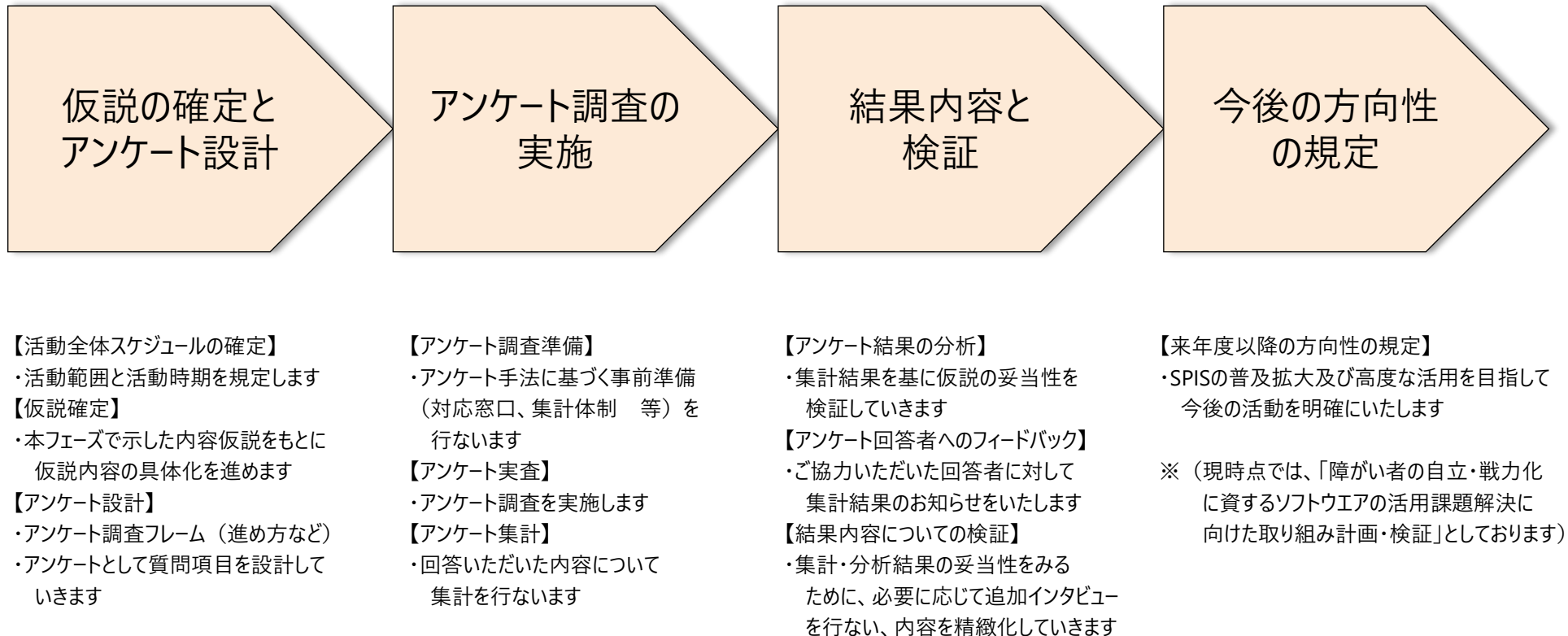
- まずは、仮説1と2に焦点を置いた活動が必要であると考えられます。

4. SPISのより有効な利用に向けて

より有効な事業を進めるために：利用者調査にみる利用状況と意向

- 今年度のプレサーベイを踏まえて、調査活動を行なうと想定した場合の進め方を示しました。
- 大まかな流れは、ユーザーの今後の方向性を規定すべく、データ収集と活用を進めます。

< 今後より詳細な調査を行なう場合の主な流れ（案） >





**Envision the value,
Empower the change**